

# ランバスとベーツ 私たちの土台を築いた二人

田 淵 結

関西学院は 1889（明治 22）年の創立。創立者で初代院長となったランバスは、アメリカ南メソジスト監督教会の宣教師で、関西学院は、その教会の牧師養成ための神学部と、後に中学部となる普通学部の二学部が今の阪急王子公園付近に設立された。その教育は現在よりもはるかにキリスト教信仰を全面に打ち出すミッション・スクールであった。ところが学院創立十年目となる 1899 年、文部省は訓令という形で、文部省認定学校における一切の宗教教育を禁止する政策を打ち出す。これは関西学院だけでなく、他のキリスト教学校にとっても大きな打撃であった。文部省の指導に従った学校とするか、それを拒んで私塾としてでもキリスト教を守るか、関西学院の最初の試練だった。

その大きな試練の中に第四代院長となったカナダメソジスト教会宣教師、ベーツが関西学院に着任する。彼の方針は、まず社会的に評価される学校として関西学院を確立させることだった。文部省の規定にしたがった専門学校としての神学部、高等学部（文科・商科）、そして中学部の開設。上ヶ原時計台正面に掲げられているエンブレムの四つのシンボルは、この関学の「四つの学校」を示している。

そこで彼は非常に興味深い形でキリスト教主義を展開する。Mastery for Service。マスター、サービス、どちらも私たちの普通の生活のなかで普通に使われている言葉、だからこの言葉はほぼすべてとっていいぐらいの関学人に受け入れられている。しかし、主とされるイエスが、すべての人間への僕となった、というキリスト教の中心的メッセージがそこにはきちんと込められている。直接的な表現を用いずに、大切な意味が多くの人に受け入れられる、ベーツは関学ならではのこのようなキリスト教主義の提唱者であった。神学部でも、経済学部の学びにおいても、関学のキリスト教主義はそれぞれの形でしっかりと展開されてきたのだ。

ランバスが据えたキリスト教主義、ベーツはそれを社会に評価される学校のなかで大きく成長させた。そして今、その二人の築いた土台の上に私たちは立っている。

（宗教総主事）

（宗教活動委員会連続講演会「関西学院創立 125 周年を覚えて『関西学院の礎を築いた人・出来事』から学ぶ」第一回より要約）